

## 希望を求め続けること

### ◇目の前で展開する戦争

2022年2月24日、蘇南高校が学年末考査を始めた日に、ロシアのプーチン大統領が隣国のウクライナに対して軍事攻撃を開始しました。プーチン氏の主張は、①ウクライナがアメリカ・西ヨーロッパ側の軍事同盟であるNATOに加盟しようとしており、それがロシアの安全を脅かしているということと、②ウクライナ国内のロシア人人口が多い地域（ドネツクやルガンスク）の独立を支援する、というものでした。

日々、日本でもニュースで現地の映像が伝えられているように、ロシアはウクライナの軍事施設だけでなく、病院・学校・住宅などを無差別に空爆し、ウクライナ政府の転覆を狙っています。そしてロシア国内の反戦運動や政府批判を強権的に弾圧し、無差別爆撃に関するニュースはウクライナやアメリカの捏造（フェイク）であると強弁するほか、ウクライナ側が国内のロシア人を虐殺していると主張しています。

国際連合が、ロシア側の主張こそ捏造であると断定していることからわかるように、ロシアの軍事侵攻は世界からの厳しい批判にさらされています。

ここ数日、ロシア軍がプーチン氏の予想以上に苦戦していることの焦りから、原子爆弾や生物・化学兵器の使用を検討しているのではないかという情報が、世界を駆けめぐっています。とてもおそろしい状況になっています。

### ◇大学時代に出会った友人のこと

ロシアが武力で他国を征服しようとしている事態は、おそろべきことです。プーチン氏の考え方では、9世紀にロシアという国の起源とされるキエフ公国ができたときに、ロシアとウクライナの違いはなかったから、ウクライナは独立国でなくてもよいと言います。9世紀と言えば1200年前、日本は平安時代です。当時の世界は、今とはまったく国境が違うものでした。同じ論法を使えば、中国が沖縄を日本から切り離そうとしたり（琉球王国は中華王朝の冊封体制下にありました）、ドイツがフランスを征服したりする（フランク王国時代にフランス・ドイツ・イタリアは未分化でした）ことが、正義であるということになります。遠い過去を持ち出して他国の独立を否定するのは、おそろしく侵略的な主張です。

ウクライナは、キエフ公国の時代の後、ポーランドの支配を受けた時代や、ロシアの支配を受けた時代などが続きました。ウクライナ語はポーランド語の影響を強く受けているので、ロシア語とは別の言語です。ロシアの支配におかれた時代には、ウクライナ語の使用が禁じられてきました。ウクライナは20世紀の終わりのソビエト連邦の消滅により念願の独立を果たし、ウクライナ語を国語とし、ロシアと距離をおいた外交政策をとってきたのです。

私は大学3年生の時にウクライナの首都キエフに旅をしたことがあります。35年前に出会って住所を交換して手紙のやりとりをした二人の女性（姉妹）は、最後の手紙（17年前）によれば、ベルゴロドという町に住んでいます。ロシアとウクライナの国境近くで、ロシア兵士がウクライナ攻撃を拒否して厳しい弾圧を受けた舞台になりました。私は日々のニュースを見るたびに、胸がはりさけそうな思いです。

## ◇歴史から学ぶこと

このような戦争の事態になったときに、よく言われがちな二つのことを、世界史という視野の中で見直してみたいと思います。

第一に、「戦争が始まった以上、民間人に犠牲が出るのは仕方ない」という主張について考えましょう。実は、人類は、第一次世界大戦で多大な犠牲を出した反省から、いくつもの国際法をむすんで戦争に制限を加えてきました。その一番が、「不戦条約」という取り決めで、政治的な課題を解決する方法として戦争に訴えることは、国際法違反（戦争犯罪）であると決められました。ただし、自衛戦争は例外です。プーチン氏が、ウクライナ側がロシア人の虐殺を展開していると強弁しているのは、この軍事侵攻が自衛戦争であると論理化したいからにほかなりません。

もうひとつの大切な取り決めに、戦争が起こってしまった場合であっても、それは兵士と兵士の闘いにとどめるべきであり、一般市民に危害を与えてはならないという、「非戦闘員の保護」に関する国際法があります。今、私たちの目の前で起こっているのは、明らかに国際法違反、つまり戦争犯罪です。だからこそ、プーチン氏は、ロシア軍による民間人の殺害自体がウクライナやアメリカの捏造だと、強弁しているわけです。

このような嘘がまかり通るのかと私たちはとても驚くのですが、かつてヒトラーが、どうせ嘘をつくのならば「大きな嘘」をついたほうがよい、なぜならば小さな嘘はすぐ見破られるけれども、大きな嘘はばれないのだと、主張したとおりになっています。でもヒトラーの「大きな嘘」がやがてばれたように、ロシアの場合も、いくら言論統制で国民を締め付けても、嘘をつきとおせるわけがないと思われます。

第二に、「第二次世界大戦が終わったあとの世界の平和が今回のウクライナ戦争で破壊された」という主張について考えましょう。強国が一方的にある国に攻め込み、屈服させようとしたということは、第二次世界大戦のあと、本当になかったのでしょうか。皆さんの人生とほぼ重なる直近の20年間を見ても、アメリカがイラクに軍事侵攻をしています。イスラエルがパレスチナ政府の統治するガザを空爆しています。

にもかかわらず、日本社会を含む世界の世論が、今回の戦争ほど、それらに批判的にならなかったのは、なぜでしょうか。ひとつには、その軍事侵攻が、テロリストの制圧という目的を掲げていたという理由があるでしょう。でも先ほど見た国際法との関係はどうなのでしょう。アメリカやイスラエルは一般市民を戦争に巻き込まなかったのでしょうか。そうとは言えません。にもかかわらず、世論の注目を集めなかったのは、どこかでヨーロッパのウクライナ市民は「私たちの仲間」であるけれども、中東のイラクやガザの市民は「遠い（私たちとは異なる）他者」という眼差しが、あるのではないのでしょうか。

ウクライナ市民を思いやるからこそ、「同じように思いやるべき人々が他にもいるのではないか」ということを考えるべきではないかと思うのです。

## ◇ウクライナの人々のためにできること

では、ウクライナの人々のために、私たちができることは何でしょうか。一言で言えば、「つながり」をいつも見失わないようにすることだと、私は考えます。難民救済や人々の生活支援のために募金に協力するというのは、日本にしながらできることです。私も日本ユニセフ協会に子どもの救援募金を贈りました。

今後、世界中の国々がロシアとの貿易を遮断する経済制裁を始めたことから、原油や小麦の価格がとても高くなっていくでしょう。たとえば、パンやケーキの値段が高騰することになります。でもあえてそのときに、パンやケーキを私たちが購入し続けるならば、お店の経営者を支えるだけでなく、世界の経済制裁を支えることになると思います。それはいくつもの「つながり」のなかで、結果的にウクライナ市民を応援することになる。だから普通に生活していても、私たちがすることはたくさんあるのです。

## ◇侵略者への抵抗について

最後に最も難しいテーマについて考えます。

今回のような、ある国が核兵器の使用まで言及しながら一方的に侵略をする事態が発生したことを受けて、日本も核兵器を備えるべきだと論ずる人もいます。

ウクライナのゼレンスキー大統領は、NATO軍が自分たちと戦ってくれることを望んでいました。しかし、アメリカや西ヨーロッパ諸国は、それに踏み切るとロシアが核兵器を使用し、第三次世界大戦に発展するおそれがあるため、直接的な戦闘を控えています。孤立したゼレンスキー大統領は、ウクライナ市民に軍と共に戦うよう呼びかけ、市民たちが武器をとって懸命に戦っています。

世界の人々の世論の多くは、ウクライナ市民の抵抗を応援しています。一方で、これ以上、犠牲者を出さないためには、ともかく「和平」を考えたほうがいいのではないかと主張する人もいます。和平論のことを無責任な主張であると批判する人もいますが、一定の汲み取るべきものがあると私は考えています。それは市民の戦闘参加が広がれば広がるほど、戦闘員と非戦闘員の区別がつかなくなり、ロシアの無差別爆撃が正当化されるおそれがあるという点なのです。抵抗を続けるべきなのだが、やればやるほど市民のいのちを守れなくなるという矛盾をどう解決すればよいのかという課題が、浮かび上がってくるのです。

そこで世界史を改めて振り返ると、「市民たちの防衛 (Civilian-Based Defense)」というもうひとつの戦い方が行われてきたことに気づきます。兵士とは異なる方法で、一般市民が侵略者に抵抗をしたという歴史です。武器をとって戦闘をするわけではないけれども、征服者に一切の協力をしないという形で、「市民たちの防衛」は行われました。具体的には、ゼネラルストライキ、官職の辞任、言論による批判の継続、などです。

約半世紀前の1968年、ソビエト連邦（ロシア）が自由化政策を進めていたチェコスロヴァキアを軍事侵攻しました。指導者ドプチェクは解任され、この後、およそ20年間、秘密警察の監視を受けながら機械工として生活しました。実は、ロシアはこの軍事侵攻をもっと激しく行う予定でした。しかし、ドプチェクたちチェコの首脳部は、緊急事態令を出して軍隊を兵舎にとどめ、潜伏活動によって発信された臨時ラジオ放送が、非暴力の抵抗を国民に呼びかけました。ロシア側の声明を読み上げることを命じられた政府の報道局の職員は、それを拒否しました。ロシアの物資を輸送することを命じられた鉄道関係者は、ストライキに入りました。

ソビエト連邦に占領されたチェコスロヴァキアでは、ソビエト連邦に忠誠を誓う独裁政権が成立しましたが、20年の歳月を経て、ドプチェクたちが復活するビロード革命が起こりました。そして議会制民主主義の国に大転換しました。「市民たちの防衛」が、最後には勝利したのです。こうした「市民たちの防衛」は、アメリカの黒人差別に立ち向かったキング牧師たちや10年前のチュニジアのジャスミン革命など、世界史のさまざまな大転換をうみだしてきました。

3月15日に世界を驚かせたのは、ロシアの国営テレビ放送のニュース番組で、突然、放送局の職員の女性が「戦争反対！」というプラカードをもってアナウンサーの後ろに立った様子が、世界中に放送されたことでした。これは勇敢なロシアの女性がたった一人で行った、ウクライナのための

「市民たちの防衛」です。

この日本という国で暮らす私たちは、第9条に「平和主義」をかかげた憲法を持っています。平和主義によって国を守る主体は、自衛隊の方々だけでなく、世界史の中で積み重ねられてきた「市民たちの防衛」という非暴力の闘いを行う私たちひとりひとりでもあるのではないのでしょうか。

#### ◇ まとめとして

まとめます。三つのことを皆さんに語りかけました。

第一に、「つながり」のなかでウクライナを応援していきたいですねということ。

第二に、ウクライナを応援するならば、他にも応援したほうがいい人たちがいるのではないかと  
いうこと。

第三に、侵略者に抵抗するためには、兵士たちの闘いだけでなく、「市民たちの防衛」も大きな意義をもってくるのではないかとということ。

これからもウクライナの情勢を見つめながら、自分たちがどう生きるべきかを考えていきましょう。考え続けることは、この厳しい時代にあっても、「平和という希望」を求め続けることになるからです。